林業相談

サクラのてんぐ巣病について

問　サクラのてんぐ巣病とはどんなものか，またその防除の方法をお知らせください。　（札幌市　H 氏）

答　サクラのてんぐ巣病はソメイヨシノ，ヤマザクラ，セイヨウミザクラ（桜桃）などのサクラ類に発生するもので，いたるところの公園や並木にごく普通にみられる病気である。この病気は *Taphrina cerasi* SADEBECH という菌によっておこり，病気にかかった枝の一部分がふくれて，こぶのようになり，この附近から，小枝がほうき状に沢山むらがってでる。このような状態は冬季落葉しているときによくわかる。この小枝がむらがってでている形が「天狗」の巣に似ているというので，昔からてんぐ巣病という名がつけられている。てんぐ巣病はサクラのほかに原因はそれぞれちがうが，タケ，マツ，カラマツ，トドマツ，ヒバ，カンバ，ナラ，キリなどに発生する。このなかには菌に原因するもの，ウイルスによるもの，遺伝的なもの，原因がまだはっきりしないものがある。この病気にかかって，てんぐ巣状になっている枝は，健全な枝よりも春早く葉がひらくが，葉の形は健全なものにくらべて小さくなっている。また病枝には花のつぼみがまったくつかないか，ついても非常にまれである。この小形の葉は，5月下旬から6月上旬ごろになると，縁の方から黒色になってしおれ，ちょうど霜害をうけたようにちぢれ，まもなく黒くなった葉に灰白色の粉状のものがうっすらとでき，健全葉よりも早く落葉する。この粉状物には，この菌の胞子がはいっている子のうというふくろが並んでいる。この部分の切片を顕微鏡でみると，ビニールぶくろのようなふくろに，普通8個の胞子がはいっているのがみえる。この胞子はふるくなると分芽して数十個にもなっている。この病気にかかっててんぐ巣状になった枝は数年たつと枯死する。またサクラの樹自体は，小枝がやたらに生えるので，樹勢がおとろえ，ついに枯れることがある。防除法は病気の初期に罹病した枝を切りとることが大切である。この病原菌は，てんぐ巣病枝のふくれた部分にひそんで冬をこし，多年生であるといわれている。そのため患部を切りとることは，治療およびその後のまんえんを阻止するのに効果がある。この病枝を切りとるとき注意しなければならないのは，てんぐ巣病枝のほそい枝だけでなく，そのもとの部分のこぶ状になっているところも含めて切りとることである。また大切なことは切りとる時期で，葉がひらいてこんもり茂ってからでは効果がない。葉がひらく前，できれば冬のうちに切りとることである。これは病原菌が活動するまえに防除するということである。切りとった枝は焼くか，地中に埋めるようにする。病気にかかった枝を切りとったあとに，有機水銀剤（ウスプルン，リオゲン，ルベロンなど）1 g を8－8式(旧3斗式）ボルドー液1 ℓにまぜて，樹全体に動力式噴霧機で散布する。こ

のときも葉のひらくまえ，いわゆる休眠期散布がよい。

サクラにはこのほかに，癌しゅ病，またこのごろ，枝にこぶ状のものができて縦にわれる(まだ原因がつかめなくてサクラの奇病といわれる)病気が各地でみられる。

癌しゅ病は一種の胴枯病で，北海道にとくに多く，これは冬の寒さの害が一次原因で，このあと *Valsa japonica* MIYABE et HEMMI という菌が侵入しておこる病気である。この菌糸が形成層をひとまわりすると，そこから上は完全に枯れてしまう恐ろしい病気である。

サクラの花をみて楽しむためには，みんなでもっとサクラの樹の保護につとめたいものである。

（樹病科　小口健夫）